

『すべては救済のために』

(デニ・ムクウェゲ著、加藤かおり訳、あすなる書房、2019年)

おやさと研究所教授  
森 洋明 Yomei Mori

医師である著者は、コンゴ民主共和国東部で性暴力の被害女性を助ける活動を続け、昨年ノーベル平和賞を受賞した。本書はそのデニ・ムクウェゲ氏のこれまでの歩みを綴った自伝である。

彼が働く地域では、政府軍や反政府軍、その他さまざまな反乱軍が豊富なレアメタルを資金源に活動をしていて、「世界で最も危険な場所」と言われている。本書のプロローグでも、医師の自宅が突然侵入者に襲われ、命の危険にさらされたエピソードから始まっている。しかもそれは、国連軍のベースキャンプからわずか50mしか離れていない場所での出来事である。それでもこの地域では治安は決して保障されない。「世の中に侵されることのない聖域も、悪から完全に守られている場所もない」と、病院ですら襲撃されることを体験した彼は実感する。

その病院には連日のように、性暴力の被害を受けた女性が運ばれてくる。医師は「女性の身体を可能な限りもとに戻す」ことを使命とし、さまざまな脅しに屈することなく、時には命の危険も顧みず治療を続けるのである。治療に際しては「患者からの話は耳に入れない」ようにしている。なぜなら、その話があまりにも悲惨で冷静にいらなくなるからである。確かに本書のなかで書かれている性暴力の事例だけからでも「人はどうしてそこまで残酷になれるのか？」という気持ちになり、怒りと絶望が交差する。数の多さだけでなく、その暴力性や残虐性は、単なる「性暴力」という域をはるかに超えている。医師が訴えるように、この地域ではその性暴力自体が「武器」であり「テロリズム」となっている。そうした蛮行の背景として「村々を破壊、蹂躪するのに戦車や爆撃機は必要ない。女性をレイプするだけでいい。それによって生み出されるダメージは通常の戦闘によるものに劣らない」からだと言及する。

また本書は、この『グローバル天理』でも触れた(2019年3号～5号)コンゴ民主共和国の150年間の「暴力」の歴史が、現地からの視点で描かれている。レオポルド2世の専政から1960年の植民地独立前後の混乱。国民的英雄ルンバの暗殺事件やそれに続く「コンゴ動乱」。そこから台頭するモブツ大統領やその独裁制を支援した欧米諸国。経済発展を遂げるコンゴの「黄金期」の一方で、私服を肥やし続ける大統領の実態。モブツが進めた国のザイル化(アフリカ文化の復興)では、医師自身もデニという名からムケンゲレに改名した。90年代からの反政府の動きに加え、隣国のルワンダ大虐殺の影響など、今日にまで続くさまざまな暴力が繰り返された一国の歴史が、実際にそれを生き続けてきた生の証言として語られている。

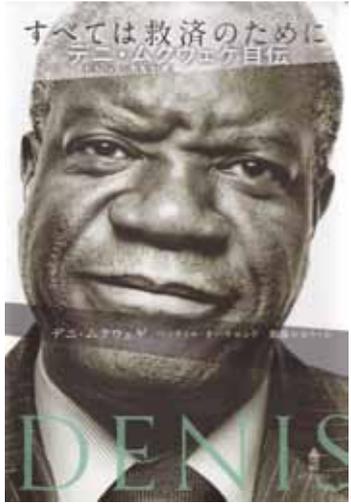
そうしたなかでの生活は、常に生と死が隣り合わせにあると言えるだろう。プロローグのエピソードだけでなく、彼のこれまでの歩みは「奇跡」の連続だった。出生直後すでに一度消えかけた彼の命は、その後の人生のさまざまな局面で救われていく。銃弾が飛び交う中の車での疾走や逮捕状が出され拘束される直前の逃走、反政府軍に占領される寸前での空港の脱出劇。命が救われるたびに、彼自身は自らの天命を自覚し、そのことが女性の救済という現在の活動につながっている。

医師としてフランスに留学するが、その生活が終わりに近づいたころ、夫婦でそれからの人生設計について話し合う。妻は

子どもたちの学校のことを考慮し、フランスに残ることを希望する。彼は医師としてそのままフランスで働き続けることができた。しかもその給与は、祖国で働く場合の100倍にもなる。「余裕のある豊かな暮らしを送れるのは間違いないから」のである。しかし、それでも話し合いを重ね、家族全員で帰国することを選択する。さまざまな場面で命が救われ、偶然が重なって医師になれたということから、彼は「明白なサイン」を感じ取っていたのである。それは彼にとって「最初に決めたことを最後までやり抜け」というメッセージだったのだ。そこには少年期に、牧師であった父親から受けたさまざまな教訓が生きていたのかもしれない。

そもそも彼が医療活動を志すようになったのは、スウェーデンのペンテコステ派宣教師とノルウェー人修道女が共同経営する学校に通ったことに拠る。植民地時代におけるキリスト教の伝道では、学校と病院の設立がしばしばセットになっていた。「未開人の文明化」の名の下、アフリカではキリスト教化が進んでいった。その歴史は、力を背景とした一方的な伝道と読み解くこともできるだろう。しかしその一方で、現場で関わってきた者は、さまざまな危険と隣り合わせのなか、教育や医療に従事してきたのも事実であろう。著者が医療活動をしているコンゴ東部の病院もそうした歴史の流れのなかにあり、彼自身も何度も教会からの支援によって助けられている。そして現在、アフリカの奥地でこうした支援活動が続けられていることで、傷ついた多くの女性が助けられている。アフリカにおける伝道宗教の活動のあり方についても示唆するところが感じられる。

ちなみに、今年5月に開催された日本アフリカ学会の年次大会で、「ムクウェゲ医師のノーベル平和賞受賞：国際社会の責任を問い直す」というフォーラムが開催された。平和賞受賞の演説のなかで医師は、国際人道法上の違反行為をまとめた報告書が議論されていないことを糾弾したが、フォーラムではその原因の検証、また、鉱物の取引規制・紛争・性



『Dépêche de Brazza』の記事暴力の結び付きなどについて話し合われた。学会の会場の一角では本書の特設コーナーが設けられた。そしてコンゴ共和国で唯一の日刊紙である『Dépêche de Brazza』は、このニュースを取り上げた『毎日新聞』の記事を紹介した。現地でも関心が高いことが窺えるが、医師の祖国であるコンゴ民主共和国は、彼が2006年に行った国連での演説を欠席した加盟国で唯一の国であり、現大統領は東部の暴力には無関心だと医師は訴える。